

# 論理的判断力を高めるための概念的知識を活用した授業実践 — 中学校社会科歴史的分野を例に —

八木 龍一\* 近藤 裕幸\*\*

\* 附属名古屋中学校

\*\* 社会科教育講座

## Practical study of using conceptual knowledge to enhance logical decision making - Using the example of junior high school social studies historical study -

Ryuichi YAGI\* and Hiroyuki KONDO\*\*

\* Nagoya Junior High School Affiliated to Aichi University of Education, Nagoya, 461-0047

\*\* Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya, 448-8542

Keywords：学びの文脈 概念的知識 深い学び

### I 主題設定の理由

#### 1-1 社会的背景と社会科教育の役割

現在、我々が生きる社会は予測困難な時代とされ、様々な分野において国境を越えた関わりが生まれ、多様化・複雑化している。そのような時代には、複雑で刻々と変化していく状況に向き合い、主体的に他者と協働して課題を解決していくことや、多くの情報や知識を整理し、物事の全体像を捉えたり、知識を抽象化したり、再構成したりする力が求められる。そして、一人一人が積極的に問題や課題を見出し、状況に向き合いながら主権者として責任ある判断ができるようになる必要がある。

学習指導要領解説においても、「選挙権をはじめとする政治に参加する権利を行使する良識ある主権者として、主体的に政治に参加することについての自覚を深めることなど、これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくことが強く求められている」とあるように、社会科としての役割の重要性を示している。

また、「主体的」や「主体性」と、エージェンシーとの関係について白井（2020）は、「単

に教師の指示通りに行動することではないとしても、反対に、生徒による自発的な行動であれば何でも良いというものでもない」とし、「エージェンシーとは、単に個々人がやりたいことをやることではなく、むしろ、他者との相互のかかわり合いの中で、意思決定や行動をきめるものである」としている。

さらにOECDのコンセプトノートにおけるエージェンシーの説明として、「誰かの行動の結果を受け止めることよりも、自分で行動することである。形作られるのを待つよりも、自分で形作ることである。誰かが決めたり選んだことを受け入れることよりも、自分で決定したり、選択することである。」とし、「主体的」や「主体性」と、エージェンシーの関係性を示唆している。

#### 1-2 社会科における概念的知識

先述した状況において求められる学習活動では、個別の知識と概念的知識の獲得が求められる。なぜならば、学習指導要領解説では、「深い学び」の視点について、『『社会的な見方・考え方』を用いた考察、構想や説明、議論等の学習活動が組み込まれた、課題を追究したり解決したりする活動が不可欠である」とし、「主として用語・語句などを含めた個

別の事実等に関する知識のみならず、主として社会的事象等の特色や意味、理論などを含めた社会の中で汎用的に使うことのできる概念等に関わる知識を獲得するように学習を設計することが求められる」からである。このことから、社会科の授業においても知識の習得（獲得）が重要であることがわかる。

社会科の授業における知識について、北（2012）は、「社会科の授業で扱われる知識は多様であると同時に、大きくとらえると、用語や語句、具体的な知識、概念的な知識といったおよそ三つのタイプに類型化することができる」とし、概念的知識については、「多くの場合、社会的事象の特色や役割、社会の様子や傾向などを表現したもの」としている。これを受けて唐木（2021）は、「概念的知識は、単元全体を通して習得させる知識です。（中略）数多くの用語や語句、複数の具体的な知識を総合させた先に、概念的知識が成立」するとしている。さらに、具体的な知識について中村（2021）は、「なぜ事実・出来事が起こったのかという起源に関する理解」をすることで習得できると整理している。これらを踏まえ、用語・語句を基に具体的な知識を習得させ、複数の具体的な知識を関連付けたり、共通点を見いだしたりし、総合的にまとめることで概念的知識を獲得させることができると筆者は考えた。また、筆者は獲得した概念的知識を活用し、社会の諸課題について判断することで、論理的な判断につながるとも考えている。

### 1-3 文脈に沿った学び

概念的知識を獲得させるためには、文脈に沿った学びが求められる。先述の通り、概念的知識を獲得するためには、複数の具体的な知識を関連付けたり、共通点を見いだしたりし、総合的にまとめる必要がある。そのためには、複数の具体的な知識に関連性や共通性などが含まれる必要がある。つまり、これらの具体的な知識がそれぞれ単独の知識として習得されるのではなく、構造的に習得されなければなら

ないのである。概念的知識は、その構造的な枠組みの中で、つまり文脈に沿った学びの中で獲得される必要がある。その学びの文脈がない授業では、生徒たちが社会科を暗記科目として捉えたり、学習に対し無気力になってしまったりすることになる。しかし、「その多くは子どもの側の問題ではなく、子どもたちに学びの文脈が取れないような課題なり場面を教師が設定していることに起因する」（奈須2020）ため、教師はこの点に配慮する必要がある。これらを満たすことで、生徒の学びに対する粘り強さや学ぶことに対する意味づけなどが行われ、文脈に沿った学びによって生徒は主体性を発揮しながら学習に取り組むことができるようになると思う。

### 1-4 深い学びと主体性の発揮

先述のことから、文脈に沿った学びをすることで、生徒は主体性を発揮する。そして、社会科においては、主体性を発揮して学習する中で、知識を構造的に習得していき、概念的知識として獲得することができるようになる。そして、獲得した概念的知識を活用して社会の諸課題を解決しようとする、つまり論理的に判断する学習をデザインすることで、学習指導要領における「深い学び」の視点が達成できると筆者は考える。そのため、本実践では、単元構想の段階で生徒の「深い学びを達成した姿」と「主体性を発揮した姿」を定義づけ、それらに迫っていく。

### 1-5 先行研究における課題

先述した北や唐木らが提唱する概念的知識の重要性を認識し、その獲得を目指した社会科の実践は多く行われてきた。しかし一方で、その多くが概念的知識の獲得が単元での学習の目標とされた授業デザインとなっており、概念的知識を活用して社会の諸課題について考える授業実践は少ない。つまり、社会科における知識を構造的に習得する実践は行われてきたが、その習得した知識を活用する実践はまだ少ないのである。そのため、筆者はそ

の課題の解決に取り組むべく、本研究を行うこととした。

## Ⅱ 目的と方法

### 2-1 本研究の目的

以上のことから、本研究の目的は、中学校社会科3年生を対象に、社会の諸課題に対して概念的知識を活用した授業実践を行うことによって、生徒が一面的で直観的なものでない、論理的な判断力を育成できるようになるのか否かを明らかにすることである。

また、生徒が文脈に沿った学びの中で主体性を発揮し、「深い学び」を実現させることで、より汎用性のある授業デザインを構築していきたいと考えた。

### 2-2 本研究の方法

本研究は、次のような方法に基づいて展開、検証していく。第一に、学びの文脈に沿った授業をデザインする。第二に、独自に作成した思考ツールを活用し、文脈に沿った学びの中で概念的知識を獲得させる。第三に、概念的知識を活用して判断させるための追究課題とその解決方法を提示し、獲得した概念的知識を活用して判断させる。第四に、振り返りカードの記述や議論前後の考え、単元の最後に行う単元レポートにおける生徒の記述などをもとにその変容を追い、手立ての有効性を検証する。そして最後に、本研究の成果と課題を整理する。

## Ⅲ 単元の構想

### 3-1 実践単元

本実践は、中学校社会科3年生歴史的分野「現代の日本と世界」で行った。本単元は、日本が二度の世界大戦を経て、その混乱の中から平和で民主的な国家を目指して再建と独立との道を進み、諸改革の展開や国際社会の変化の中で国民の生活が大きく変わっていく様子を学習する単元である。また、他国との協調を図りながら経済発展を成し遂げたり、

唯一の被爆国としての経験を基に国際平和への取組を行ったりしながら、国際社会における役割を果たしてきたこと、これからも日本が国際社会に果たす役割とは何かを考える単元でもある。

### 3-2 単元目標

#### 【知識・技能】

現代の日本が他国からの支援を基に経済発展を成し遂げてきたり、唯一の被爆国であることで平和への願いを国際社会に訴えたりしたことについて、具体的知識同士を関連付けたり、共通点を見いだしたりし、総合的にまとめることで概念的知識を獲得している。

#### 【思考・判断・表現】

現代の日本の特色を適切に捉えた概念的知識を活用し、追究課題にふさわしい解決方法について、様々な立場を踏まえながら判断している。

#### 【主体的に学習に取り組む態度】

単元の内容や学習方法から、次の学習や生活に生かそうとすることを記述するとともに、今後も考え続けたい新たな問いを見いだしている。

### 3-3 本実践で目指す生徒の姿

#### 【深い学びを実現した姿】

戦後の日本が他国と関わり合いながら発展してきた様子を多面的・多角的に考察し、獲得した概念的知識を活用して追究課題について判断している姿

#### 【主体性を発揮した姿】

学びの文脈に沿って概念的知識を獲得し、それを活用して社会の諸課題について判断する姿

### 3-4 手立て

#### (1) 二つの場の設定

本実践において、単元を二つの場面に分ける。一つ目を【獲得する場面】とし、複数の具体的知識を習得させ、それらの関連性や共通性などから概念的知識を獲得させていく。二つ目を【判断する場面】とし、獲得した概念的知識を活用して設定した追究課題とその解決方法について、判断させていく。このようにすることで、学びの文脈に沿った学習を展開する。

#### (2) 思考ツール（「概念カード」）

単元の初めに、概念的知識を獲得させるための問いである「概念の問い」に対する予想を生徒に記述させる。その後、学習内容のま



とまりごとに習得した具体的知識を記述させ、複数の具体的知識を累積させる。最後に、累積した具体的知識の関連性や共通性を見いださせ、総合的にまとめさせることで概念的知識を獲得させ、記述させる。

### (3) 振り返りカード

振り返りカードは、【獲得する場面】と【判断する場面】（議論）の学習内容や学習方法を振り返らせ、それらの有効性について記述させるものである。また、単元の最後には、単元全体を振り返らせ、今後の学習に生かしていきたいことや考え続けたいことなどを考えさせ、新たな問いを見いださせる。

### (4) 単元レポート

追究課題とその解決方法について、獲得した概念的知識を活用して判断させ、自分の考えをまとめさせる。

## 3-5 単元の流れ

【獲得する場面】	
1	「概念の問い」に対する答えを予想する。 「戦後の日本はどのように発展してきたか」
2	GHQ占領下における日本の国家づくりについて追究する。 学習課題① 「第二次世界大戦後の日本は、どのような国家をめざしたか」
3	日本が国際社会へ復帰していく様子について追究する。 学習課題② 「日本はどのように国際社会へと復帰したか」
4	冷戦下の世界と日本の様子について追究する。
5	高度経済成長と経済大国になった日本について追究する。 学習課題③ 「日本はどのように経済大国へと成長したか」
6	冷戦後の世界と日本の様子について追究する。
7	習得した具体的知識同士の関連性や共通点などを見いだしたりし、総合的にまとめることで、概念的知識を獲得する。

【判断する場面】	
8	【獲得する場面】を振り返る。 追究課題と解決方法を設定し、判断する。 追究課題 「国際社会の中で、日本が最も果たすべき役割は何か」 解決方法A 「発展途上国への援助」解決方法B 「平和外交の推進」
9	追究課題にふさわしい解決方法について議論する。
10	単元レポートと【獲得する場面】の振り返りを行う。

## IV 授業の実際

### (1) 【獲得する場面】の様子

第1時では、第二次世界大戦までの世界や日本について振り返り、戦後の日本について知っていること（既習の知識）を確認した。生徒からは、「GHQに占領された」「高度経済成長が起こった」「冷戦があった」などの声が上がった。これらの発言からは、戦後の日本が他国と協調しながら発展してきたことや、国際社会における日本としての役割の大きさを考えた内容は得られなかった。既習の知識を確認したあと、「戦後の日本は、どのように発展してきたか」を「概念の問い」として与え、予想した答えを「概念カード」に記述させた。以下は、一部の生徒が記述した内容である（資料1）。

### 【資料1】 第1時の一部の生徒の記述

生徒A
「自国のあり方を見直し、日本国憲法などの決まりをきちんと定めた。また、他国との関わり方も以前より良い方向になり、新しい文化を取り入れたことで発展してきた。」
生徒B
「戦争の経験を生かして平和を目指した憲法をつくり、各国と協力する条約を結び、外国に支えられながら発展してきた。」
生徒C
「高度経済成長や国民の意見を取り入れることで、よりよい日本になり、発展してきた。」

生徒Aの記述からは、日本国内で起こったことと他国とのつながりについて記述されているものの、それらの関連性や共通点などが見いだされていないことがわかる。生徒Bの記述からは、他国とのつながりについて記述

されているものの、国内における発展の背景等の説明が不十分であることがわかる。生徒Cは、「高度経済成長」という一つの側面しか説明できておらず、多面的な考察ができていない。また、時間内にまとめられず、白紙のままであったり、記述の途中であったりした生徒もいた。これらのことから、第1時の時点では、複数の具体的知識の習得が不十分であり、また、それらの関連性や共通点などが十分に見いだされていないことがわかった。

第2時では、戦後の日本において、GHQによる占領下で政治的・経済的な様々な改革が行われたことを学習した。また、それらの改革が非軍事化や民主化といった目的をもっていたことや、戦後の日本がどのような国家をめざしていたのかについて学習した。これらの学習を踏まえ、「第二次世界大戦後の日本は、どのような国家をめざしたか」を一つの学習課題（学習課題①）として与え、それに対する答えを具体的知識①として「概念カード」に記述させた（資料2）。

多くの生徒が、GHQ占領下で三つの基本原則を基にした日本国憲法の制定や様々な民主化政策などについて、社会的事象の推移や事象相互のつながりを示しながら具体的知識①を習得することができた。

#### 【資料2】 一部の生徒が記述した具体的知識①

##### 生徒D

「GHQの占領政策の基、軍隊の解散、財閥解体等の民主化を推し進め、国民主権、基本的人権の尊重、平和主義を大原則とした日本国憲法を定めることで、民主的で平和的な国家をめざした」

##### 生徒E

「経済の民主化や、日本国憲法の制定など、再び戦争が起こることのない、人々が安全で平和に生活することができるような国家をめざした」

第3時では、冷戦下の日本が、どのように他国と関わりながら国際社会へと復帰していったのかを学習し、「日本はどのように国際社会へと復帰したか」を二つ目の学習課題（学習課題②）として与え、第2時と同様に具体的知識②として「概念カード」に記述さ

せた（資料3）。生徒の多くは、日本が西側諸国の一員として独立した背景や、ソ連との国交回復をきっかけに国際連合に加盟し、国際社会へと復帰していく経緯をまとめることができた。

#### 【資料3】 一部の生徒が記述した具体的知識②

##### 生徒F

「サンフランシスコ平和条約や日米安全保障条約を結んだりしながら、西側諸国の一員として独立を回復したり、ソ連との国交回復によって国際連合に加盟したりすることで、国際社会へと復帰した。」

##### 生徒G

「日本は他国と条約を結んだり、国際連合に加盟したりし、資本主義の国として他国とのつながりを深めることができたことで、国際社会へと復帰した。」

第4時では、冷戦下における軍拡や緊張緩和の動き、世界の地域統合の動きや日本の近隣諸国との国交回復の動きなどを学習した。

第5時では、高度経済成長や技術革新などをきっかけに、日本が経済発展していく様子について学習し、「日本はどのように経済大国へと成長したか」を三つ目の学習課題（学習課題③）として与え、それに対する答えを具体的知識③として「概念カード」に記述させた（資料4）。生徒の多くは、高度経済成長期やバブル経済期の国内における経済政策や技術革新を基に経済発展が進んだことや、他国との貿易関係の活発化を背景に、日本が経済大国へと成長していったことをまとめることができた。

#### 【資料4】 一部の生徒が記述した具体的知識③

##### 生徒H

「日本は、政府の政策によって経済成長が促進され、技術革新を背景として重化学工業が発展した。そして、高い技術により自動車やPCなどを世界各国へと輸出した。その後、NIESなどとの関わりを深め、経済大国となった。」

##### 生徒I

「バブル経済で土地や株式を売り買いしたり、NIESとの関係を深めたり、他国との文化的な交流をすることで経済が回るようになり、経済大国へと成長していった。」

第6時では、冷戦終結後のグローバル化が加速していく世界や日本の様子について学習した。

第7時では、これまでに習得した具体的知識①～③を振り返り、それらの関連性や共通点を考えさせ、学級全体で共有した。生徒からは、「他国との関係があること」や「平和的に発展してきていること」などが挙げられた。これらを基に、再び「概念の問い」である「戦後の日本は、どのように発展してきたか」について考えさせ、総合的にまとめたものを「概念カード」に概念的知識として記述させた。また、概念的知識をなぜそのようにまとめたか、理由も記述させた。以下は、一部の生徒が記述した内容である（資料5）。

#### 【資料5】一部の生徒がまとめた概念的知識

##### 生徒J

##### 〈概念的知識〉

「日本は、戦争を放棄して平和的で民主的な憲法をつくったり、他国との関係を改善して国内で経済成長を促進させたりすることで、世界の国々にとっても重要な国となることで発展してきた。」

##### －理由－

具体的知識①②から、平和を目的とした政策や他国との講和、関係改善を行っており、これらがすべて「平和」を目指していることがわかる。また、具体的知識②③から、経済復興を目的としたGHQの政策や、経済発展を目指した日本の企業の努力などがわかり「経済発展」を目指していることがわかる。そして、これらの日本の姿が世界に認められたことから、上記のような概念的知識にした。

##### 生徒K

##### 〈概念的知識〉

「二度と戦争を起こさないように、自由かつ平和な国を目指して民主主義国家を形成した。そして、これにより国際社会への復帰を果たし、様々な国との交流を深めることで日本は発展してきた。」

##### －理由－

（具体的知識）①では、GHQの指導により軍勢力を捨てて新たな憲法を制定し、民主主義かつ平和な国家をめざした。（具体的知識）②では、サンフランシスコ平和条約の調印や国際連合への加盟により、世界各国との関係を取り戻した。そして、（具体的知識）③では、高度経済成長後、他国との貿易によって高度な技術でつくられた製品を輸出することで多くの利益を生み、日本は発展してきた。これらの理由から、上記の概念的知識にした。

生徒Jの記述からは、習得した具体的知識①～③の関連性や共通点などを見いだした上で、概念的知識を総合的にまとめることがで

きたと考えられる。しかし、生徒Kの記述を見ると、それぞれの具体的知識を習得していることは読み取れるものの、それぞれがどのような関連性や共通点などをもっているかを示すことができていないことがわかる。また、他の生徒の記述からは、理由については具体的知識①～③の関連性や共通点などを見いだしていることが読み取れるものの、概念的知識として十分にまとめられていない生徒も見られた。

#### (2) 【判断する場】の様子

第8時では、【獲得する場面】での学習過程において上手く進められた点や問題点などを「振り返りカード」に記述させた。以下は、一部の生徒が「振り返りカード」に記述した内容である（資料6）。

#### 【資料6】一部の生徒の「振り返りカード」の記述

##### 生徒L

上手く進められた点は、自分のもっている既存の知識と、今回学習してきた知識を照らし合わせ、再確認することでより時代の流れをつかめたところです。問題点は、概念的知識の理由を述べる際、起こったこととその影響を述べただけで、（他国との）「関わり」という要素が抜けてしまったことだと思いました。

##### 生徒M

アメリカなどが日本に対して政策を行うときに、どのような目的で、どのような影響があったのかをまとめることで、概念的知識をまとめる際に、どのように発展したのかが分かりやすくなって、概念的知識を出しやすくなることができた。しかし、具体的知識をまとめる際に、一つ一つの出来事の原因から影響までをダラダラと書いてしまったことで、それぞれの出来事のつながりや共通点を見つけにくくなってしまったことが問題点だったので、これらを意識しながらまとめていこうと思った。

これらの記述から、生徒L、Mともに、社会的事象の原因と結果の関係を意識しながら、概念的知識の獲得へと学習を進めることができたと考えられる。

第8時ではその後、獲得した概念的知識を活用させるために、「国際社会の中で、日本が最も果たすべき役割は何か」を追究課題として設定した。さらに、追究課題の解決方法として、A「発展途上国への援助」、B「平和外交の推進」を提示した。次に、追究課題



にふさわしい解決方法はどちらか、またその理由は何かを、生徒がそれぞれ獲得した概念的知識を活用して判断させた。判断し、まとめた考えについては、学級全体でそれぞれの考えを共有することのできるアプリ「ロイロノート」を使用した。ロイロノートに提出された生徒の考えからは、追究課題にふさわしい解決方法としてA「発展途上国への援助」を選択した生徒が34名中の8名、B「平和外交の推進」を選択した生徒が残りの26名であった。

第9時では、前時に判断した考えを基に、追究課題にふさわしい解決方法について、学級全体で議論を行った。議論では、まず、ロイロノートに提出されている他の生徒の考えに対し、反論や質問などを行った。以下は、議論の中で出てきた生徒のやりとりの一部である（資料7・8）。

#### 【資料7】 第9時の議論の一部①

- ー Aを選択した生徒NとBを選択した生徒Oのやりとりー  
 N 「核の抑止論という言葉もあるのに、原爆を使用した経験があるからBを選択する、ということに疑問があります。もう少し詳しく教えてください。」  
 O 「核の恐ろしさを一番知っているのは日本であり、経験からその反省を生かして他の国と協調してきている。その日本が平和に向けて世界に発信していくことはとても影響力のあることだと思います。だから、解決方法はBの方がふさわしいと思います。」

#### 【資料8】 第9時の議論の一部②

- ー Bを選択した生徒PとAを選択した生徒Qのやりとりー  
 P 「GHQのサポートで日本が発展してきたことは理解できるが、なぜそれが日本が発展途上国を援助する必要がある、という考えになるのか疑問です。」  
 Q 「世界が安定するためには、その原因の一つでもある貧困を改善すること、貧しい国を支援することが必要だと思います。かつての日本がアメリカを中心とした国々に支えてもらったように、今の先進国である日本の責任だと思います。だからAを選びました。」

反論や質問とそれに対する回答を中心とした議論を行う予定であったが、本時はほとんどが質問とそれに対する回答という形で行われた。しかし、質問者の多くは相手がどのように考えているのか、どのような概念的知識を基に判断しているのかを知ることができ、自

分の考えを見直そうとしている姿が見られた。

第10時では、議論の振り返りと単元レポート、そして単元全体の振り返りを行った。議論の振り返りでは、以下のような記述が見られた（資料9）。

#### 【資料9】 一部の生徒の議論の振り返り

##### 生徒R

「議論前までは解決方法のAとBでは大きくかけはなれているように感じていたが、朝鮮特需について話合っているところで、平和と経済、貿易などは深く関わっているということがわかった。また、核は良くない、と考えていたが、核の抑止論という視点を知り、核をもつことで平和を保とうとする考えもあることを知りました。」

##### 生徒S

「核の抑止論の議論の場面で、日本や他国との関わりや現状を踏まえると、現実的に無理なのか、各国の状況をきちんと理解して考えていくことが大切だと気付いた。」

生徒R、生徒Sはどちらも核の抑止論という、自分にはなかった視点を学んでいる姿が見られる。その他の生徒についても、日本がこれまでに経験してきたことや求められていることなどを踏まえ、追究課題について真剣に向き合っている姿が多く見られた。単元レポートでは、追究課題にふさわしい解決方法はAとBのどちらか、そしてその理由はなぜか、を記述させた。その後、振り返りカードに単元全体の振り返りを記述させた。以下は、一部の生徒の単元レポートでの記述内容である（資料10）。

#### 【資料10】 一部の生徒の単元レポートの記述

##### 生徒T（解決方法A「発展途上国への援助」）

僕は、Aの解決方法がふさわしいと思う。理由は三つある。一つ目は、教科書p.267やp.272より、太平洋戦争で敗戦国となった日本を、GHQが様々な改革を行って支援したことによって国家として復興し、経済的に発展したことが分かること。このことから、日本も同様に発展途上国を経済的に支援することで、世界全体の発展にもつながり、日本だけでなく、世界中の人々の幸福につながると考えられる。二つ目は、教科書p.266より、GHQが日本国憲法の草案をつくり、日本を三つの基本原則を基にした国になるように政治的に支援したことが分かる。このことから、戦争や紛争が起こっている国を政治的に支援することで、それらの国々の人々が安全に生活をおくることができると考えられる。これらのことから、僕はAの解決方法を選んだ。

**生徒U**（解決方法B「平和外交の推進」）

具体的知識①・②より、日本は戦争を放棄して非軍事化をめざしてきたことをきっかけに国際連合に加盟した平和主義国であることがわかる。また、唯一の被爆国であることから、核の恐ろしさも知っている。核の恐ろしさを世界に伝え、世界平和を目指す国際連合での役割も果たせると考える。また、概念的知識の「他国と交流を深めたことで発展した」というところや教科書p.248の本文にもあるように、他国との平和的な関係をもつことで貿易も活発化し、経済的な発展につながると考える。よって、追究課題にふさわしい解決方法はBの「平和外交の推進」だと考える。

上記から、生徒T、生徒Uはどちらも概念的知識を活用していることがわかる。また、具体的知識や教科書にある記述も根拠として補足することで、より論理的に追究課題について判断している様子が見られる。

**(3) 単元における評価**

概念カードにまとめた概念的知識を【知識・技能】として、単元レポートに記述した考えを【思考・判断・表現】として、単元の目標に照らし合わせて評価したところ、以下のような結果になった（表1）。

**【表1】 単元末における二つの観点における評価**

観点 \ 評価	A	B	C
知識・技能	23名	7名	4名
思考・判断・表現	28名	4名	2名

上記の結果から、概念的知識を十分に獲得していると見なすことができる生徒（知識・技能のA評価）は23名（約68％）で、概念的知識を活用して追究課題についての判断を十分に行うことができた生徒（思考・判断・表現のA評価）は28名（約82％）であった。

**V 成果と課題****(1) 本研究の手立ての有効性**

本研究では、四つの手立てを講じた。以下は、それぞれの手立ての有効性について考察した内容である。

**① 二つの場面の設定**

まず、【判断する場面】では、多くの生徒が獲得した概念的知識を活用して、追究課題

について判断することができた。しかし一方で、【獲得する場面】において概念的知識を獲得する際に、社会的事象の原因と結果についてのみ着目する生徒が多く、日本と他国との関係性について着目した生徒は少なかった。

**② 思考ツール（「概念カード」）**

学習内容のまとまりごとに具体的知識としてまとめ、それらを蓄積させていったことで、概念的知識を獲得する際に、社会的事象の因果関係に着目してまとめることができた。しかし、具体的知識をまとめる際に、要点をうまくまとめられず、具体的知識同士の関連性や共通点を見いだすことに難しさを感じている生徒が多くいた。

**③ 「振り返りカード」**

生徒自身が二つの場面での自身の学習過程を的確に振り返り、その後の学習に生かそうとしている生徒が多くいた。しかし、「二つの場面」や「概念カード」など、手立てそのものの有効性を示す記述があまり見られなかった。

**④ 単元レポート**

多くの生徒が、「概念カード」にまとめた概念的知識や議論を通して得た知識や視点を基に、追究課題について判断している様子が見られた。しかし、概念的知識の獲得が不十分であった生徒の多くは、社会的事象の因果関係が不明瞭であったり、解釈に飛躍が見られたりすることが多かった。

**(2) 本研究の成果**

本研究では、学習内容を具体的知識として整理し、それを概念的知識として獲得させた上で追究課題について判断させることで、多くの生徒が学びの文脈に沿って学習を進め、社会に見られる課題に対して論理的な判断をすることにつなげることができた。また、多くの生徒が、生徒Tの単元レポートでの記述に見られるように、政治的な視点や経済的な視点、日本や他国など、多面的・多角的に社会的事象を考察することができた。



### (3) 本研究の課題

一部の生徒は、概念的知識を獲得する際に、具体的知識同士の関連性や共通点を見いだすことに難しさを感じていた。この原因は、それぞれの具体的知識を習得する際に、社会的事象の推移や事象相互のつながりなどの社会（歴史）的な見方・考え方を十分に働かせられなかったことにあると考える。そのため、具体的知識習得の際の学習課題を吟味したり、見方・考え方を生徒に示しながら学習を進めたりするなどの工夫が必要だと考える。

- ・中村友香「複数の歴史的事象を関連付けて考察する力を育成する中学校社会科学学習指導の工夫－知識の構造化を促す問いと学習活動の設定を通して－」、広島県立教育センター研究報告、令和3年度教員長期研修（前期）、2021年、3ページ
- ・奈須正裕『ポスト・コロナショックの授業づくり』東洋館出版、2020年、75ページ

## Ⅵ おわりに

本研究を通して、概念的知識を活用することが論理的判断力の育成につながることをわかった。一方で、概念的知識を獲得するために、社会的な見方・考え方を十分に働かせる必要性も認識することができた。今後は、地理的分野や公民的分野なども含めた様々な単元で実践を重ね、生徒が主体性を発揮しながら社会の諸課題について考えていくことができるよう工夫していきたい。

## 引用・参考文献

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説－社会編－』東洋館出版社、2018年、15ページ
- ・白井俊『OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来』ミネルヴァ書房、2020年、86ページ
- ・OECD\_LEARNING\_COMPASS\_2030\_Concept\_note\_Japanese、OECD、2019年、3ページ
- ・北俊夫『社会科学力をつくる“知識の構造図”－“何が本質か”が見えてくる教材研究のヒント－』明治図書出版、2011年、76ページ
- ・澤井陽介・唐木清志編著『小中社会科の授業づくり 社会科教師はどう学ぶか』東洋館出版社、2021年、pp.233－234